

メッセージアウトライン 使徒の働き 2:1～21「全世界に福音を」

[1:3-9]「イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。『エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。』そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。『主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。』イエスは彼らに言われた。『いつか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。』こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった」

主イエスは死より復活して、この地上にいる四十日の間に弟子たちに短期集中講義のようにして聖書のこと、神の国のこと、ご自身のことを教えられたことであろう。→ルカ 24:32

そしてエルサレムを離れないで父なる神の約束、すなわち聖霊が降るのを待ちなさいと言われた。それによって彼らは力を受け、地の果てにまでイエスの証人となるのである。

[2:1]「五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた」

「五旬節」…ギリシア語で「ペンテコステ」 イスラエルの民のエジプト脱出を記念する過越の祭りから五十日目の小麦の刈り入れを感謝する祭り。(レビ 23:15～17) それで五旬節と呼ばれる。この日は日曜日。エルサレムの町は祭りのために地方や諸国から上って来た人々で大いににぎわっていたことであろう。この日

エルサレムで百二十人ほどのイエスの弟子たちは同じ場所に集まっていた。約束の聖霊が与えられるように心を合わせて祈っていたのであろう。

[2-3] すると突然、不思議な現象が起こった。聖霊が降ったのである。①突然、天からの激しい風が吹いて来たような響き。②炎のような舌が分かれて現れ、ひとりひとりの上にとどまった。これらは聖霊そのものではなく、約束の聖霊が降られたことの目に見え、耳に聞こえるしるしであった。これは聖霊が降り、聖霊によって力強く生きる時代がこの時から始まったというしるしである。これは一回限りの出来事。同じことは二度と起こらなかった。

[4]「すると、皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた」→神の大きなみわざを(11)。

[5-6]この物音を聞き、多くのユダヤ人たちが集まってきた。彼らは弟子たちが他国のことばで話しているのを聞いて、呆気にとられてしまった。

エルサレムには神殿があるので敬虔なユダヤ人たちは世界のどこに住んでいたとしても最終的にはエルサレムに住むことが願いであった。それで多くの敬虔なユダヤ人たち、特に年配の人々は老後をエルサレムで送ろうと引っ越してきて住んでいたのである。そして彼らにも激しい風の吹いてくるような響きが聞こえた。

[7-13]集まってきたのは天下のあらゆる国々からエルサレムに来て、住んでいる敬虔なユダヤ人たちであった。→パルティア人、メディア人、エラム人、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントスとアジア、フリュギアとパンフィリア、エジプト、クレネに近いリビアなど地方に住む人々、滞在中のローマ人、生粋のユダヤ人もいれば改宗者もいた。またクレタ人とアラビア人もいた。このように世界の国々で生活していた人々が、めいめいの国のことばを聞いたので、彼らは驚き当惑した。(9-12)そこには百二十人ほどの弟子たちがいたので百二十通りの言語で話されていたのであろうか。しかし、「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って嘲る者たちもいた。(13)「新しいぶどう酒」はまだ十分に発酵していないので、甘みがあり、アルコール分が弱い。そのような弱いぶどう酒にも酔って

いるとって彼らは嘲ったのである。これは外国語を理解しない地元のユダヤ人たちであったであろう。

[14-21]そこでペテロは他の 11 人の使徒たちと共に立って弁明をし始めた。(14) 今は朝の九時なので酔っているのではない。(15) 朝の九時というのはユダヤ教では祈りの時間であり、酒を飲んで酔っ払うことなど考えられない。彼は旧約聖書のヨエル書 2:28~32 を引用する。これは世の終わりの時代に起こることの預言。「終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ…」(17~ 18) この五旬節の日以降、聖霊がまさに「注ぐ」ということばがぴったりするほど豊かに与えられる時代になるのである。旧約時代にも確かに聖霊の働きはあったが、それは神の選ばれたごく限られた人々だけであった。→サムソン、サウル、ダビデ等 しかしこの五旬節以降まさに「注ぐ」ということばがぴったりするほど豊かに聖霊が信仰者に与えられる時代となるのである。「息子や娘は預言する」…「預言」とは神から受けたことばを語ること。→福音を伝えること。「青年は幻を見、老人は夢を見る」…恍惚状態になるというのではなく、老いも若きも福音を伝えるビジョンが与えられるということであろう。

19~21 節で言われていることはヨエル書 2:30~32 からの引用で、キリスト再臨の時、世の終わりの時に起こる天変地異の現象である。「血と火と立ち上る煙」…世界規模の戦争のことか。

→マタイ 24:6~8, 黙示録 6:4,8 「太陽は闇に、月は血に変わる」→黙示録 6:12

聖霊が豊かに与えられることも、天変地異が現れることも、終末の時代の大きな特徴である。五旬節の日以来、大いなる終末の時代に人類の歴史は突入したのである。そしてこの時代に「主の御名を呼ぶ者は、みな救われる」。(21) これは豊かな聖霊の働きがあるゆえである。「主の名を呼ぶ」とはイエス・キリストを救い主と信じるということ。これはユダヤ人だけでなく世界中の人々がその対象となる。

弟子たちが聖霊に満たされ、いろいろな外国語で福音を語りだしたということは、

まさに地の果てまで出て行ってイエス・キリストの証人となる教会の誕生を飾るにふさわしい出来事であった。しかし、この五旬節の日に大きなしるしが伴って聖霊が降ったということは初代教会における一度限りの出来事であり、それ以後、同じことは起きていない。スタートの号砲は一度だけ鳴らされれば十分なのである。それゆえ今日ではイエス・キリストを救い主と信じる人に聖霊が与えられる時、そのようなしるしは与えられないし、必要ではない。

今、私たちに求められることは、そのような外面的なしるしを求めることではなく、人びとがイエスの弟子たちのもとに集まり、驚きあきれ、そのわけを知ろうとしたような聖霊に満たされた生き方であり、イエス・キリストのすばらしさと神の救いを伝え、証しすることである。

弟子たちは明瞭に他国のことばで神のみわざを語った。今日、日本においても、また大部分の他の国においてもそれぞれの国語、地方語の聖書が翻訳されており、それぞれの国語を話す説教者、伝道者、奉仕者が備えられている。これは初代教会の五旬節の日に起こった出来事が世界大で実現しているといえる。

福音が世界中で宣べ伝えられ、信じる人々が多く起こされる。これこそ収穫を感謝する五旬節の意義に通ずるところがあるのではないか。今はそのような時代なのである。

私たちも今や約束の聖霊が豊かに与えられる時代に行かされている者として、聖霊に満たされて神のために良き実を結ぶことができるように心から祈り求めていきたい。